

医師・中村哲さん 追悼上映会

アフガニスタン 干ばつの大地に用水路を拓く

(ドキュメンタリー・74分)

監督 谷津賢二

朗読 菅原文太

企画 ペシャワール会

製作 日本電波ニュース社

「百の診療所より一本の用水路を！」戦乱の干ばつのアフガニスタンで、無謀とも思える土木工事に挑んだ一人の日本人医師・中村哲。2003年3月から7年の歳月をかけて全長全長約25km（現在27km）の用水路を完工、3000ヘクタールの農地が甦った。現地農民の自立のために近代工法を最小限に抑え、日本の江戸時代に完成した伝統工法を採用しての治水事業は、農業土木の原点とも評価される。戦乱の地に真の平和をもたらすものは何か、静かに問いかける7年間の記録。

日時 3月25日（水）

開場 18:45 開会 19:00 ~ 21:30

上映後、中村哲さんとともに現地で仕事をされたペシャワール会の方にお話しいただきます。

会場 宮地楽器ホール・小ホール（定員150名）

（JR武蔵小金井駅南口正面1分）

上映協力費 500円

【主催】キムーンフィルム

中村哲さんは、昨年12月4日朝、アフガニスタンで何者かに銃撃され、帰らぬ人となりました。

中村哲さんは、1990年代からアフガニスタンで医療支援に従事、そして、「武器や戦車では問題は解決しない。農業の復活こそが、アフガン復興の礎だ」と考え、白衣を脱ぎ、アフガンの人々とともに乾いた大地をうるおす用水路の建設に乗り出しました。

過酷な自然との闘い。米軍による誤射。現地の人々とともにあらゆる苦難を乗り越え、用水路建設は行われました。中村哲さんは亡くなられても、用水路によってもたらされる水の恵みと実りが、アフガニスタンの流域65万の民の暮らしを支えています。

アフガニスタンで献身的な復興支援を続けた中村哲さんの活動を記録したドキュメンタリー映像を通じて、その足跡に触れ、中村哲さんの平和への思いを共有し、そのわずかでも引き継ぐことができればと思います。

ここもかつては砂漠だった

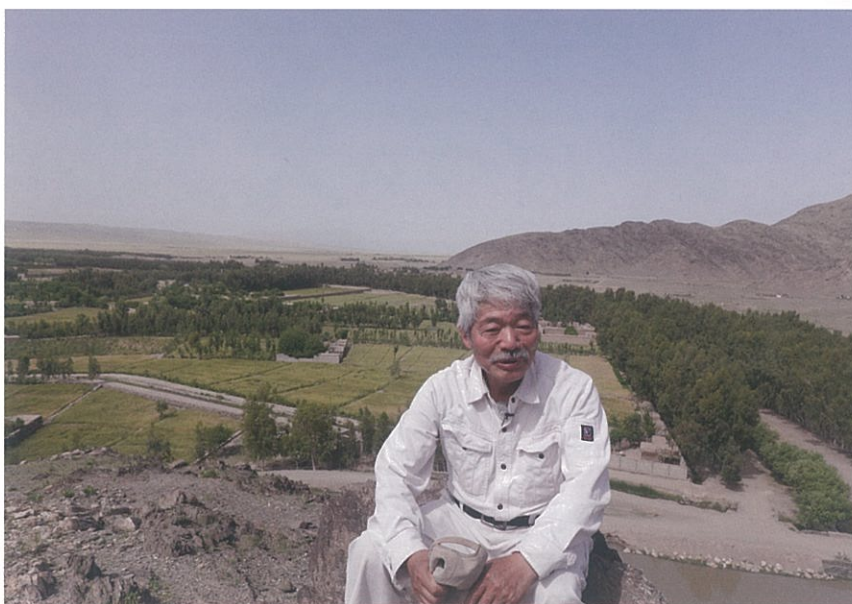
中村哲さんが遺したメッセージ

現地30年の体験を通して言えることは、私たちが己の分限を知り、誠実である限り、天の恵みと人のまごころは信頼に足るということです。

（「天、共にあり」はじめにより）

「信頼」は一朝にして築かれるものではない。利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが、心に触れる。それは、武力以上に強固な安全を提供してくれ、人々を動かすことができる。私たちにとって、平和とは理念ではなく、現実の力なのだ。私たちは、いとも安易に戦争と平和を語りすぎる。武力行使によって守られるものとは何か、そして本当に守るべきものとは何か、静かに思いをいたすべきかと思われる。

（「天、共にあり」終章より）



水の仕事を始めて19年、干ばつは動揺しながら確実に進行しているように思われます。川沿いも気候変化で渇水と洪水が併存し、年々荒れていきます。温暖化の影響はここアフガニスタンでも凄まじく、急速に国土を破壊しています。

それでも依然として、「テロとの戦い」と拳を振り上げ「経済力さえつければ」と札束が舞う世界は、砂漠以上に危険で面妖なものに映ります。こうして温暖化も進み、世界がゴミの山になり、人の心も荒れていくのでしょうか。一つの時代が終わりました。

とまれ、この仕事が新たな世界に通じることを祈り、真っ白に砕け散るクナル河の、はつらつたる清流を胸に、来る年も力を尽くしたいと思います。

良いクリスマスとお正月をお迎えてください。

（ベシャワール会会報142号2019年12月4日発行より）

